



神奈川県立歴史博物館

平成31年1月28日発行 通巻210号

だより

JAN. 2019 Vol.24 No.

3

Newsletter of the Kanagawa Prefectural
Museum of Cultural History



「横浜浮世絵」という言葉を知っていますか？……………2

私的・曾我二直菴筆《竹林七賢図》の楽しみ方

—館蔵屏風絵展のお知らせをかねて—……………6

THE けんぱく PUNCH

ポケット学芸員、キミにきめた！……………8

曾我二直菴筆「竹林七賢図」(部分)

「横浜浮世絵」という言葉を知っていますか？

桑山 童奈

はじめに

「横浜浮世絵」という言葉は当館が誇る浮世絵コレクションである丹波コレクションの旧蔵者丹波恒夫氏（1881～1971）が造った言葉で、安政6（1859）年6月に開港した横浜の街や来日した外国人の姿、彼らの生活、明治5（1872）年に開業した鉄道を代表とする文明開化のモノを描いた浮世絵のことを呼びます。丹波氏はそれまでは「横浜絵」などと呼ばれていたこれらの浮世絵の歴史資料的価値を評価し、「横浜浮世絵」と呼ぶことを提唱しました。現代に生きる私たちは、浮世絵といえば歌舞伎役者の似顔絵やスタイリッシュな女性、旅への憧れを掻き立てるような各地の名所が描かれたものを思い浮かべるでしょう。そのため、洋装の外国人や洋風建築物を描いた横浜浮世絵は、ほかのジャンルの浮世絵とは一味違う印象を抱くでしょう。

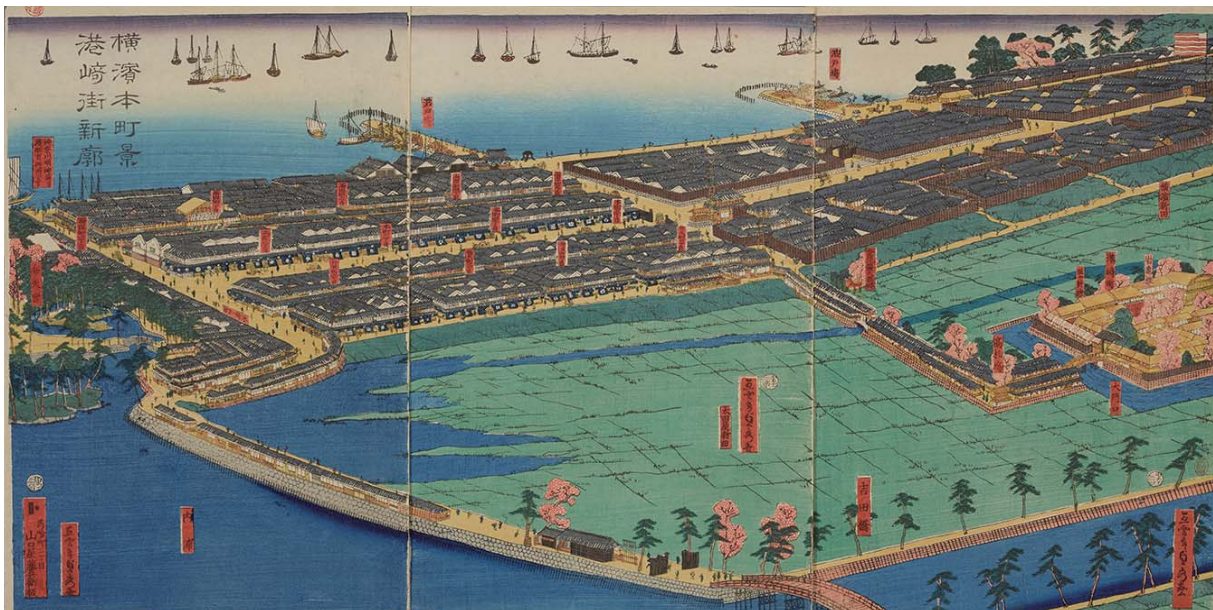
その丹波氏の薫陶を受け、浮世絵の収集をはじめたのが公益社団法人川崎・砂子の里資料館を創設した斎藤文夫氏（1928～）です。2016年9月までは川崎で自身のコレクションを公開していたほか、各地の展覧会で紹介される機会も多く、そのコレクションは大勢の人々に親しまれています。この二人のコレクターは自らが住む神奈川県内が描かれた浮世絵を熱心に収集し、横浜浮世絵についても充実したコレクションを形成しました。今年、2019年は横浜開港から満160年となります。当館ではこの機会に丹波、斎藤コレク

ションを中心とした「横浜浮世絵」の特別展を開催し、横浜のイメージをご覧ください。

1 横浜浮世絵の世界 - 横浜誕生

安政6年6月横浜は開港しました。外国人と日本人との衝突を避けるため、東海道神奈川宿から離れた場所にある横浜が選ばれたのです。そのため、開港以前の横浜は浮世絵に描かれることはありませんでした。しかし、開港翌年の2月、横浜の街を描いた浮世絵が出版されはじめます（浮世絵の刊行年月については、画面にある刊行にあたっての検閲印から推定します）。

五雲亭貞秀「横浜本町景港崎街新廓」【図1】は開港場を描いた初期の浮世絵です。海に突き出している二つの波止場のうち右側の波止場あたりから右に外国人居留地、左側に日本人居住区と今はない洲干弁天社（現在、弁天通、弁天橋の名が残っています）があります。海岸から整然と並ぶ建物の間を横に通る海岸に平行したやや広い道は、開港当初から今にいたるまで横浜のメインストリートである本町通り、右の中ほどの桜が咲き誇る一廓は港崎遊廊^{みよさき}です。遊廊の周囲は緑が広がり、いまだ開発されていないことが一目わかります。横浜浮世絵とは呼ばれますが、これらの作品も江戸で出版されていました。江戸の版元（浮世絵プロデューサー）たちは横浜開港という大ニュースについて、第一に、新しい横浜の街並みを紹介したのです。



【図1】五雲亭貞秀「横浜本町景港崎街新廓」



【図2】 一川芳員「異人屋敷料理之図」

2 横浜浮世絵の世界 - 外国人との出会い

浮世絵師たちが次に描いたのが外国人たちの姿です。開港後、それまで見ることもなかった外国人たちがやってきます。自分たちとはまるで異なる顔立ちや衣服、その生活に興味津々だったのでしょう。男女に子どもたち、おまけに犬まで描かれます。

当時、人気の浮世絵といえば歌舞伎役者の似顔絵を描いた役者絵（いわばプロマイド）でしたが、外国人たちもまるでスターのように国籍ごとに描かれました。馬に乗っていたり、机に向かってペンで何かを書いていたたり、パンを焼いていたたり。さまざまな姿が、まさに手を替え、品を替え描かれました。一川芳員「異人屋敷料理之図」【図2】では台所で西洋人と使用人らしい中国人の男性が包丁で何かを切ったり、フライパンの中を混ぜたりと立ち働く様子が描かれていま

す。

描かれる人々は安政五箇国条約の締結国 - アメリカ、オランダ、ロシア、イギリス、フランスと彼らの使用人としてやってきた中国人が中心で、5枚程度のシリーズとして出版されました。この展覧会ではこのような外国人プロマイドをシリーズ単位で紹介し、浮世絵師たちが外国人たちの生活をいかにとらえ、描き分けたかをご覧ください。

さらに、外国人たちの母国にも好奇心は広がります。芳虎「蛮国名勝尽競之内 ^{いざりすろんどのみなと} 英吉利龍動海口」【図3】はいかにも外国らしい石造りの建物のある風景と外国人たちが描かれます。中央上部の文章にはイギリスの都はロンドンであること、テムズ川があることなどが記されています。筆者の仮名垣魯文（1829～94）は戯作者として有名ですが、横浜浮世絵に記される外国情報の筆者としても名前がしばしば見られます。ほかにも外国語の単語などが紹介される作品もあり、絵とともに文字による外国情報も楽しめた様子うかがえます。

なおこの絵は、絵師の芳虎がロンドンに渡航してスケッチして描いた、という訳ではありません。芳虎はロンドンの風景が描かれた本などを参考にして描いたと思われます。ほかの浮世絵師たちも多くの場合、資料を参考に外国や外国人の姿を描いていたと考えられます。それでも情報の少ない当時の人々にはまだ見ぬ外国や外国人が真に迫って見えたのではないのでしょうか。

3 横浜浮世絵の世界 - 大火を経て明治の横浜へ

慶応2（1866）年10月、横浜に大火が発生しました。横浜浮世絵に華やかに描かれた港崎遊廓も焼失し



【図3】 芳虎「蛮国名勝尽競之内 英吉利龍動海口」



【図4】三代歌川広重「横浜海岸通之図」

ました。それから、横浜の街は再整備がはじまります。浮世絵にも石を使っただけにも洋風な建造物が描かれます。

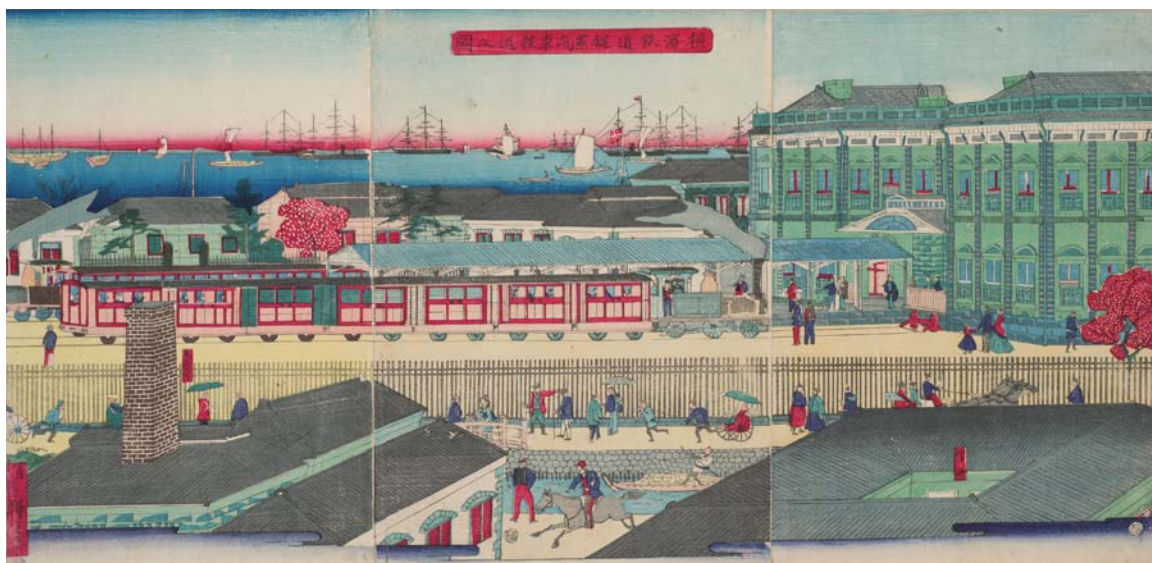
明治3年に出版された三代歌川広重「横浜海岸通之図」【図4】は波止場の様子を描きます。【図1】でまっすぐであった波止場は「象の鼻」のように曲がって伸びてきました。後ろにみえる石の塔屋が3つある洋風の建造物は、現在の横浜開港資料館の場所にあったイギリス領事館です。

さて明治に入ると、新しいモノの発信地は東京になっていきましたが、明治5年9月、新橋（東京）横浜（現在の桜木町駅）間の鉄道開通は大ニュースであつたらしく、蒸気車は開業以前から浮世絵に描かれました。三代広重「横浜鉄道館蒸気車往返之図」【図5】（川崎・砂子の里資料館蔵）にはアメリカ人技師ブリジェンス設計の駅舎と蒸気車が描かれます。手前にはガス会社（現在の横浜市立本町小学校の敷地内）の煙

突が見え、当時最先端の“場所”が切り取られた空間となっています。この後、横浜浮世絵の出版数は減りますが、伊勢山皇大神宮や時計台がシンボルの町会所（現在の横浜市開港記念会館の前身）、など、今の私たちに親しみのある場所も描かれました。

4 横浜浮世絵の絵師たち

さて、横浜浮世絵を描いた浮世絵師について紹介しましょう。安政6年当時、幕末の浮世絵界で人気があった葛飾北斎、初代歌川広重は既に亡くなっていました。歌川国芳、初代歌川国貞（三代豊国）にとっては晩年期にあたりますが、彼らはほんのわずかししか横浜浮世絵を描いていません。したがって横浜浮世絵の主力絵師は、広重、国芳、国貞の弟子たちでした。なかには明治に活躍する月岡芳年（1839～92）もいますが、これまで彼らとその作品の評価が高くなかったことも、横浜浮世絵があまり知られていない理由の一つで



【図5】三代歌川広重「横浜鉄道館蒸気車往返之図」（川崎・砂子の里資料館蔵）

しょう。

芳虎、芳員、二代歌川広重、三代広重、二代歌川国輝などの浮世絵師たちの中で、第一人者は五雲亭貞秀（1807～没年不詳）です。橋本玉蘭斎という名前で地図作者としても知られる貞秀は、鳥瞰図とよばれる上空から俯瞰するような構図で日本全国を浮世絵に描きましたが、横浜は特に繰り返し描いています。貞秀の鳥瞰図は数多くの短冊で地名を示すのが特徴で、その場所がどこであるのかを詳細に説明する、情報量の多い浮世絵になっています。

開港初期、万延元年の「横浜本町景港崎街新廓」【図1】と慶応3年「横浜細見図 其二」【図6】を比べてみましょう。【図6】の前年にあった大火で町の様子は大きく変わります。【図1】では華やかな港崎遊廓の周辺はまだ何もありませんが、【図6】では遊廓は姿を消した上、建物がひしめいていて、再生から完成に向かう都市の成長を確認することができます。

【図6】は本来、大判錦絵を10枚つなぎ、タテ約37cm、ヨコ約250cmとなる、浮世絵にしては大パノラマ画面です（写真は5枚分）。貞秀は大判と呼ばれる大きさの紙を6枚、横向きに8枚などと自由につなげた大きな画面に横浜の街を描きました。この展覧会では、貞秀のパノラマ画面を見比べ、街の成長を確認していただければ、と思います。

5 その後の横浜浮世絵

明治の終わりには、より簡易な出版媒体におされ浮世絵自体が廃れていきました。その後横浜浮世絵は、開港以来の横浜の歴史を語る役割を果たすようになります。風景画にせよ、外国人の姿を描いたものにせよ、浮世絵というものはモノ・コトを正確に写したものとはいえません。浮世絵師が資料を参考に描いたものが多い上、誇張や脚色があるものと推測できます。しかし、正確でなくても、色鮮やかな浮世絵は開港期の横浜を伝える媒体として説得力があります。

丹波氏は昭和10（1935）年に開催された関東大震

災からの復興を祝う復興記念横浜大博覧会に出品しました。また、神奈川県立博物館が誕生する以前の昭和32年には朝日新聞社から『横浜浮世絵』を刊行しています。「丹波氏の精神を受け継いだ」と語る斎藤氏は10年前、開港150年の折に、川崎・砂子の里資料館は横浜浮世絵コレクションを紹介する展覧会を開催して好評を博しています。

今回の展覧会では800点を超える横浜浮世絵のうち、約240点を前期、後期で入れ替えて、横浜浮世絵の全貌をご覧いただく予定です。横浜をあまり知らない方にはその魅力を、横浜を愛する市民の方にはより横浜を愛していただけるように浮世絵に描かれた横浜の魅力を引き出したいと考えています。また、後世のためにも横浜浮世絵を集めた二人のコレクターの心意気をも感じていただければ幸いです。

＊図版は5以外は当館丹波コレクションの作品です。

参考文献

丹波恒夫『横浜浮世絵』朝日新聞社、1962年。

神奈川県立博物館編『集大成横浜浮世絵』有隣堂、1979年。

『横浜開港150周年 横浜浮世絵』川崎・砂子の里資料館、2009年。

（くわやま どな・主任学芸員）

特別展 横浜開港160年

横浜浮世絵

会 期：2019年4月27日（土）～6月23日（日）

休館日：月曜日（ただし4月29日、5月6日は開館）

※会期中、一部の作品・資料の展示替があります。



【図6】「横浜細見図 其二」

私的・曾我二直菴筆《竹林七賢図》の愉しみ方

—館蔵屏風絵展のお知らせをかねて—

橋本 遼太

谷折り▼

屏風をたてる

写真図版をみていて、なぜかしっくりとしない屏風絵があります。当館所蔵の曾我二直菴筆《商山四皓・竹林七賢図屏風》です。印章（絵師の捺した判子）が両脇にくるように配置するという通例に従って並べて置いても、どこか座りが良くないように感じられるのです。そこで、縮小版の屏風を作ってみて、色々と配置を試してみました。

まず、左右の隻を入れ替えてみると、岩が中央で連結するようにも見え、この配置が良いかもしれないと一旦は思いました。しかし、しばらく眺めていると、岩の量槐により重心が中央に寄りすぎてしまい、やはりこれもいまいひとつ。今度は、ちょうどカタカナの「ハ」の字に近い形になるよう、両隻を向かい合わせてみました。すると、中国古代の士大夫たちの世界に入り込んだような感覚になり、なおかつ左右隻の中央方向には彼らのいる空間が奥へ抜けていくような広がりを感じられるようになりました。

この屏風は商山四皓と竹林七賢という異なる二つの画題を左右隻に別々に描くもので、左右隻の景のつながりには特段意識が払われていないため、そもそも、横に並べて一雙の大画面を楽しむものではないかもしれません。そんな商山四皓と竹林七賢に共通するのは、俗塵を避け高士が集った隠逸の地を表すという点。向かい合わせに置き、その間に身を置くことは、隠逸の高士の世界を体感するのに調度良い鑑賞法かもしれません。それはまるで、向かい合わせにした洛中洛外図屏風のなかに座って、京都を一望するような感覚になるのと似ているようです。曾我二直菴が生きたのは、洛中洛外図が主題としての活力を持ち多数制作されたのとまさに同じ時代のことでした。

絵の中と七賢たちと

屏風をたてると三扇目（右から数えて三つ目）と四扇目の間は谷折りになります【図1】。平面的な写真図版で見ていたときにはなかった角度が生まれて、笛の音色に合わせて踊る高士と拍子をとる高士が、向き合うように見えてきました。高士たちに近づいて、その目線まで屈んでみると、まるで彼らの世界に入り込んでしまったかのように感じられます。絵の中に入り込んで、絵の中を旅する、画中の人物たちと交流する、



【図1】笛の音に合わせて踊る高士

それがこの絵の愉しみ方の一つでしょう。

竹林七賢という画題

一般に竹林七賢図は、魏から晋への王朝交代期に乱世を逃れ、竹林に集い清談を交わした七人の賢者（阮籍、王戎、山濤、向秀、嵇康、劉伶、阮咸）を描くものです。竹林七賢に選ばれた七人が生きたのはおおそ3世紀の半ばころ。彼らが生きた同時代には七賢の抽出はまだされていなかったと考えられています。七賢が後人によって選択されたのが東晋時代以降。顧愷之（344～406）の描く竹林七賢があったと張彦遠が著す『歴代名画記』は伝えています。現存最古の作例としては5世紀中葉の制作になる中国南京市の西善橋東晋墓塋画が知られています。これらの初期の竹林七賢図が各高士の個別の肖像であったと考えられるのに対して、元の趙孟頫が描いた七賢図は「七賢皆席而坐、吟詠閑適、其間陳箏筆硯、及酒樽缶。」（『墨緣匯觀』）であったといい、また明の劉仲賢の《竹林七賢図》（台北国立故宫博物院）は「一執如意、憑几与对坐者談。一撫琴、一展卷仰視。」（『石渠宝笈』）といった図様であるなど、七賢が互いに視線を交わし会話する様子で描かれるようになります。

日本では、遅くとも室町時代前期には五山僧たちを受け入れられていたことが義堂周信『空華集』などに見て取れます。現存作例では室町時代後期の啓孫筆《竹林七賢図屏風》（六曲一隻、東京国立博物館）が古い例で、これに次いで古いのが、雪村が描き残した数点の竹林七賢図や、「狩野法眼元信七十七齡書之」の落款のある《商山四皓・竹林七賢図屏風》（六曲一雙、東京国立博物館）です。

二直菴の竹林七賢図

当館所蔵の曾我二直菴筆《竹林七賢図》は上記の作例に次ぐものといえます。二直菴が描く高士たちは、小さな椀に水（『世説新語』や『晋書』に説かれる竹林七賢の故事からすると、これはお酒でしょうか）を注ぎ飲み交わしたり、あるいは笛を吹き手拍子を取り、それに合わせて踊ったりしています。清談の様子とはとても思えないような光景で、二直菴が竹林七賢をどのように捉えていたか、気になるところです。

これに関して、興味深い作例が雪村筆《竹林七賢醉舞図》（メトロポリタン美術館）です。笛を吹き、鼓を打ち、太鼓を叩く高士たち。これに合わせて踊る高士。さらに酒を勧める高士もいます。踊る高士の袖が余って、翻り、垂れ下がる様は、二直菴の描く、踊る高士の姿によく似ています。この絵の主題については、唐代に山東の徂徠山麓の竹溪に集った李白ら六人の酒友の逸話に取材した「竹溪六逸図」と竹林七賢との混同、あるいは援用があるとの説もあります。二直菴筆《竹林七賢図》についても同様に「竹溪六逸」の故事が関係している可能性もあるでしょう。

現存作例を見る限り、竹林七賢図は、「七賢」「竹林」を主要な要素とするのみで、構図や図様は絵師に委ねられているように思えます。魏晋交代期に特徴ある生き方をした士大夫としてではなく、そうした内実を度外視し単なる憧れの隠棲者とみられるようになったからこそ、竹林七賢は、商山四皓と対になりえ、また様々な図様で描かれることにもなったのではないのでしょうか。竹林七賢は、いわば大きな器として、故事人物にまつわる他の逸話を引用し、ときには無自覚に取り込み、描き継がれた画題だったと思われます。

詩人としての阮籍

竹林七賢のひとりの阮籍には『詠懷詩』と総題する詩が伝わります。その五言の詩形 82 首のうち、『文選』や『古詩紀』が第一に掲げるのが次の詩です。

夜中不能寐	夜の中ばなるまで寐ぬる能 ^い わ ^{あた} ず
起坐彈鳴琴	起ち坐して鳴琴を弾く
薄帷鑒明月	薄き帷 ^{とぼり} に明月鑑 ^て り
清風吹我襟	清き風は我が襟 ^{えり} を吹く
孤鴻號外野	孤鴻 ^{ここう} は外 ^{はるか} なる野に号 ^{さけ} び
朔鳥鳴北林	朔鳥 ^{さくちよう} は北 ^は の林に鳴く
徘徊將何見	徘徊 ^{はい} して將 ^は た何 ^は をか見る
憂思獨傷心	憂思 ^{やぶ} して独 ^{やぶ} り心 ^{やぶ} を傷る

阮籍が抱いていたこの孤独な感情を二直菴は知っていたのでしょうか。十分理解したうえでこの高士に阮籍像を託したかもしれませんが、あるいはまったく知らなかったかもしれません。たとえ後者だとしても、こうした詩人としての、史実としての阮籍をふまえていないから良くないと言ってしまうのは粋ではありません。いま目の前にある絵を、二直菴が描き出した竹林七賢を、あれこれ考えながらともに楽しみましょう。

参考文献

山下善也「狩野探幽筆《竹林七賢・香山九老図》屏風—その革新性—」『静岡県立美術館紀要』第 6 号、1988 年
林進「雪村筆「竹林七賢図屏風」（畠山記念館所蔵）について」『日本屏風絵集成 第四巻 人物画：漢画系人物』講談社、pp.143-151、1980 年
中本大「「七賢図」という「画題」」『論究日本文学』74、pp.24-32、2001 年
吉川幸次郎『阮籍の『詠懷詩』について』岩波書店、1981 年

展示予定作品

前島宗祐筆《四季耕作図屏風》六曲一隻、室町時代
狩野探幽筆《四季耕作図屏風》六曲一双、江戸時代
元信印《山水花鳥図屏風》六曲一隻、室町時代
曾我二直菴筆《商山四皓・竹林七賢図屏風》六曲一双、江戸時代
《南蛮図屏風》六曲一双、江戸時代
《木賊図屏風》六曲一双、江戸時代
《平家物語図屏風》六曲一隻、室町時代
《源平合戦図屏風》六曲一双、江戸時代
《源平合戦図屏風》六曲一隻、江戸時代
鈴木南嶺筆《鶴図屏風》六曲一双、江戸時代
岡本秋暉筆《花鳥図屏風》六曲一隻、江戸時代
狩野永隆筆《東海道図屏風》六曲一双、江戸時代
《東海道図屏風》六曲一双、江戸時代 など

（はしもと りょうた・学芸員）

特別陳列 屏風をひらけば —神奈川県立歴史博物館の屏風絵—

会 期：2019 年 3 月 2 日（土）～ 31 日（日）
休館日：毎週月曜日、3 月 19 日（火）
※ 3 月 21 日（木）は無料開館日



ポケット学芸員、キミにきめた！

常設展示を見回り中のパンチの守が、宇賀田情報資料課長と出くわしました。課長は展示ケースの前でスマートフォンアプリを操作している様子。このアプリについて、課長にインタビューしてみました。

パンチの守（以下、パ）：宇賀田課長、展示室でスマホをスワイプして何をしておるのじゃ？

宇賀田（以下、宇）：おお、これは営業部長。お疲れ様です。展示室で使える便利なスマホアプリをインストールしたので、早速利用しているんです。「ポケット学芸員」と言うんですよ。

パ：なぬ？もしや、学芸員を捕まえて戦わせるアプリか！

宇：違いますよ。これは、展示品の解説をしてくれるアプリです。その場に学芸員がいなくても、これを起動すれば専門家の解説を読んだり聞いたりできるんです。

パ：ほう。それは痒いところに手が届くアプリじゃのう。それで、聞けるというのは？

宇：操作画面で  をタップすると、音声の流れるんですよ（編注・インタビュー時には常設展示のみ対応）。ポチっとな。

パ：おおっ、声が聞こえてきたぞ。こうして読み上げてもらえると、文字で読むよりも理解が深まる気がするのう。流暢で聞き取りやすい音声じゃが、誰がしゃべっているんじゃ？

宇：実はこの声、神奈川県内の高校生のみなさんが話しているんです。

パ：なんと！てっきり、プロのアナウンサーかと思ったわい。こんなスーパー高校生たちが県内にいるとは、恐れいったのう。

宇：それもそのはず、ナレーションを担当したのは、放送部に所属する現役の高校生で、県大会の上位入賞者ばかりなんです。中には全国大会で上位に入賞した方もいます。

パ：す、すごすぎる経歴じゃ…。協力して頂いた高校生たちよ、礼を言うぞ！

「ポケット学芸員」は無料でご利用いただけるアプリです。展示室の外でもお使い頂けるので、高校生の名ナレーションをお聞きになりたい場合は、さっそくダウンロードしてみて下さいね（英語版もあります）。

※「ポケット学芸員」をお使いになるには、OSに「iOS」または「Android」を搭載したスマートフォンかタブレット端末が必要となります。お持ちのスマートフォン等にAppStoreやGooglePlayから「ポケット学芸員」をダウンロードしてください。なお、館内で音声ガイドを聞かれる場合には、周囲に音が漏れないようイヤホンを使用するなどしてください。当館展示室等では無料Wi-Fiでご利用いただけます。

ダウンロードや操作方法は下記URLをご覧ください。

<http://welcome.mapapps.ne.jp/pocket>



（宇賀田 信／うがた まこと・情報資料課長
小松 百華／こまつ ももか・臨時学芸員）

▶ 当館営業部長のパンチの守（右）と
宇賀田情報資料課長（左）



▶ ポケット学芸員操作画面



▶ 高校生によるナレーション録音の様子



発行：神奈川県立歴史博物館 <http://ch.kanagawa-museum.jp/>

〒231-0006 横浜市中区南仲通5-60 TEL 045-201-0926 FAX 045-201-7364

発行日：平成31年1月28日 印刷：有限会社イソノ



@kanagawa_museum

